

Project Based Learning を取り入れた日本語授業及び 日本語キャンプの実践を通してのタイ人教師の気づき

アーパーポーン ナオサラン
(国際交流基金バンコク日本文化センター)

1. はじめに

国際交流基金バンコク日本文化センター (JFBKK) では、タイ中等教育の日本語教育を担う教師育成支援の施策として「にほんごじんフォーラム^(注1)」(以下、JS-Forum)の枠組みを活用し、タイでよく展開されている「日本語キャンプ(=合宿研修)」を実践の場として、ファシリテーター育成支援を展開している。タイ教育省との共催で2015年に引き続き、2016年もタイ人中等教育教員を対象とした「日本語教育プロジェクト型集中研修会」(以下、「教師キャンプ」と、タイ全国の高校生を対象とした「日本語インテンシブ・キャンプ」(以下、「インテンシブ・キャンプ」)を実施した。

キャンプのメイン講師は、2015年の「教師キャンプ」、「インテンシブ・キャンプ」さらに、「JS-Forum 2015」(以下、フォーラム)に参加した中等教育教員2名が務め、フォーラム中に考えた活動案を元にキャンプのテーマを決めた。フォーラム後、二人は自分たちの学校の授業で試行した後、キャンプの活動案とスケジュールを作成した。また、2016年度「JS-Forum」参加予定の教員2名もサブ講師となって運営、企画を行った。

タイでは、現代のグローバル社会で必要とされている21世紀型スキル(探求する力・推測する力・他者と協働する力など)を各授業に取り入れることが重要視されるようになってきている。外国語の授業も21世紀型スキルを育成しながら語学を身につけるという考え方に変わってきた。今回のキャンプも昨年に引き続き、21世紀型スキルを教育現場へ取り入れるために、その手法の一つと考えられる「プロジェクト型学習」(Project Based Learning ; 以下、PBL)を導入した。PBLとは、学習者中心、内容重視の学習法で、学習者が関心を持つ課題を教室内外で行うものである。学習者は主体的に課題を発見し、深い思考、観察を行い、情報を収集し、分かりやすくまとめ、発表するという過程(①テーマ設定②計画・準備③調査・研究④制作⑤発表⑥まとめ)を通し、仲間と問題を解決する力を育てていく(鈴木2012)。

以上を踏まえ、本稿は「教師キャンプ」「インテンシブ・キャンプ」のメイン講師を務めた二人のタイ人中等教育教員がPBLを取り入れたキャンプ事業を通し、どのような「学び」と「気づき」を得たのかを考察する。

2. 教師キャンプ及び日本語インテンシブ・キャンプの実施概要

両キャンプの実施概要は表1の通りである。

	教師キャンプ	インテンシブ・キャンプ
開催時期	2016年4月1日～4月5日	2016年5月2日～5月6日
会場	タイ中部ナコンパトム県の会場	タイ中部ナコンパトム県の会場
参加者数	教師：89人、日本語力：N4相当	生徒(高校生)：108人、日本語力：N5相当
講師	中等教育教員4名(メイン2人、サブ2人)	中等教育教員3名(メイン2人、サブ1人)
テーマ	『災害！マイペンライ？—ภัยพิบัติ! ไม่เป็นไรจริงหรือ (災害！本当に大丈夫か)』 理由・背景： ①災害の被害にあったことがないまたは気にしないという人たちが改めて災害についてよく知り、防災意識を高めること。	

	②災害をテーマとしたキャンプを通して日本語を学ぶこと。	
実施目的	1) 参加者が PBL を体験し、知識を得る。 2) 21 世紀型スキルを用いた授業を理解し、自分の授業に工夫する。 3) キャンプで得た知識やアイデアを工夫し、学校・地域での授業やキャンプを実施する。 4) ファシリテーターの役割を知る。 5) 日本語の運用力の向上。	教師： 1) キャンプのアイデアを得る。 2) 情報共有、ネットワークの形成。 3) ファシリテーターの役割を理解する。 生徒： 4) 21 世紀型スキル（探求する力・推測する力・他者と協働する力など）の育成。 5) 日本語学習に対する動機づけ・運用力の向上。
実施内容	1 日目：オリエンテーション、21 世紀型スキル講義、事前課題①（タイの中で起こる災害の情報）の共有 2 日目：事前課題②（災害クイズ）、事前課題③（災害体験者にインタビュー）の共有、災害体験活動 3 日目：ブレインストーミング、発表の準備 4 日目：最終発表、まとめのレポート執筆 5 日目：教師としてのふりかえり（フィードバックの共有、21 世紀型スキルとの関連）、講師による授業実践例	1 日目：オリエンテーション、事前課題①の共有 2 日目：スアンサンプラーン見学 3 日目：事前課題②、③の共有、災害体験活動 4 日目：ブレインストーミング、発表の準備 5 日目：最終発表、キャンプのふりかえり

表1 「教師キャンプ」、「インテンシブ・キャンプ」の実施概要

各キャンプは、5 日間に渡り実施された。キャンプに参加する前に事前課題に取り組み、キャンプ参加中、災害について様々なインプットを得て、さらに協働作業を通し、自分たちで調べ、最終発表として災害に役立つ物またはキャンペーンを考えることとなっていた。

「教師キャンプ」では、PBL 活動の学習者体験に加え、教師の立場で PBL や 21 世紀型スキルに関する講義を受け、ふりかえりをする時間を設けた。一方、「インテンシブ・キャンプ」では、それぞれの活動について「教師キャンプ」で一度実施していることから、うまくいかなかったものや生徒にとって難しすぎるものを改善した。

3. メイン講師を務めたタイ人中等教育教員の「学び」と「気づき」

今回のキャンプメイン講師を務めた二人の教員は、「教師キャンプ 2015」に参加しときに提出した活動案で選抜された。活動案を審査したのは、2015 年のキャンプ講師 4 名である。

教師 A は 30 代男性の元英語教師で、教授歴約 8 年である。これまで色々な語学キャンプの講師を担当してきた。教師 B は 30 代女性で、教授歴約 2 年の若手教師である。キャンプ実施を通しての「学び」と「気づき」及び PBL に対する「学び」と「気づき」はどのように変化したかという 2 つの観点からインタビューとアンケートに回答してもらった。使用言語は母語のタイ語であったが、筆者が訳した。

3.1 キャンプ実施を通しての「学び」と「気づき」

キャンプ実施後、教師 A と教師 B にアンケート記述とインタビューを行った。キャンプ実施を通しての「学び」と「気づき」について、①学んだことや気付いたことは何か、②実施してみて改善したいところは何か、③実施前と実施後の心境はどうなったかという 3 つの質問項目の回答を表 2 にまとめる。

項目	教師 A	教師 B
①	講師チームの中で、教授歴やキャンプ経験が最も長いので、責任を強く感じたが、教師キャンプを経験したことで、不安が減り、より一層自信や余裕も持てるようになった。これまで自分がやってきた仕事やキャンプをよく整理できるようになった。	これまで自分がやったことのないキャンプ講師を務めることができ、各活動の過程に細かい作業が必要だと分かった。
②	各活動を時間通りに管理するのが難しかった。	時間の管理。これまで一人で授業をしていたため、協働が少し苦手だったが、今後チームに役に立てるように頑張りたい。

③	これまで 10 年の間様々なキャンプの講師を務めてきて、生徒が楽しければ成功すると思っていたが、2015 年の教師キャンプに参加したことで楽しさだけでなく、キャンプの目標が達成されることがとても重要だと思えるようになった。今回のキャンプを実施することに当たり、色々な人と意見交換をしたことでよりよいものに改善するよう努めたい。	経験が浅いため、講師を務めることができるかどうか不安だった。行き詰まったとき落ち込んだこともあったが、協働について勉強になり、皆で支え合ったことで自信につながった。
---	---	--

表 2 キャンプ実施を通しての「学び」と「気づき」

3.2 PBL に対する「学び」と「気づき」

キャンプ実施後、二人の講師に PBL に対する「学び」と「気づき」についてアンケート記述を取った。質問項目は、①PBL に関する背景知識と教授経験、②PBL への意識の変化、③PBL デザインのキャンプの良い点・難しい点、④PBL を自分の授業・地域のキャンプへの取り入れ状況である。その回答を表 3 にまとめる。

項目	教師 A	教師 B
①	修士課程で外国語としての英語教育の授業の一環として理論を学んだ。2016 年以前に、World-Class Standard School という教育水準向上の方針に従い、PBL を用いて Independent Study を実施した。	地域の教師研修で PBL に関する講義を受けた。今回のキャンプ実施で PBL を授業に取り入れたのが初めてだった。
	理論に関する部分は聞いたことがある表面的な知識にふれたが、具体的なやり方については、2015 年に行われた教師キャンプに参加したからこそ深まった。(教師 A、B 両者)	
②	生徒に理解してもらうために様々なインプットを与え、自分で調べさせ、教師はファシリテーターとして必要に応じアドバイスをあげるということを意識するようになった。	PBL の中核は「実際にやってみる」ということだけだと思っていたが、キャンプ実施を通し、各活動の目的、問いかけの分析を意識するようになった。
③	<u>良い点</u> ：全国から集まった生徒が経験を共有しながら協働のスキルを磨くことができる。 <u>難しい点</u> ：教師が実施過程に対する理解を深めなければ、どんな知識（インプット）を与えたら生徒が学習目標を達成できるかデザインすることが難しくなる。	<u>良い点</u> ：生徒が自ら実行したことによって課題解決力や創造力などの 21 世紀型スキルの向上につながる。 <u>難しい点</u> ：生徒の学習成果がどのようにまたどのレベルにするかを共通目標がはっきりしなければ難しい。
④	各学期に 1 回 PBL デザインの授業を取り入れている。現在、高校 2 年生の授業に取り入れているほか、学校・地域の日本語キャンプや英語キャンプにも取り入れている。PBL を授業に取り入れることによって生徒の日本語の授業に対する考え方が変わってくる。日本語に自信がない生徒でもグループ作業の協働を通し、協働や創造力といったスキルを身につけ、自分がチームに役立てると思うようになり、日本語授業への態度が前向きになる。	高校 2 年生を対象に日本文化という授業に PBL を少しずつ工夫した。キャンプ講師を務める前に講義形式で授業を行っていたが、キャンプ実施後、生徒にグループで興味のある日本文化を調べさせたり、その結果をクラス前で発表させたりするように工夫した。生徒たちが楽しく情報を調べ、発表方法を考えるようになり、学習の様子が変わり始めた。

表 3 PBL に対する「学び」と「気づき」

4. 考察

メイン講師を務めた二人のタイ人中等教育教員の PBL を取り入れたキャンプ事業を通しての「学び」と「気づき」から分かるように、二人の講師は、PBL について初めて意識するようになったのは、教師キャンプ 2015 年に参加し、学習者体験をした時からだった。さらに、自分たちで PBL デザインのキャンプ講師を初めて務める実践過程を通し、目標設定や協働など様々なことについて学

び、理論だけに止まらず PBL を用いての具体的なやり方の理解も深まった。いずれにしても、二人の講師は教授経験の相違によってキャンプ実施に対する意識の差が窺える。

教師 A はこれまでいくつかのキャンプを手掛けてきたことからその責任を強く感じ、キャンプの細かい作業から目標達成、PBL デザインの重要性及びチームワークの大切さを意識するようになった。以前、キャンプ講師を務めたとき、生徒が楽しくなればよいと思っていたが、今回のキャンプ講師を務めたことで PBL の実践過程についてもよく考えるようになり、活動の目標達成や生徒の学習成果をしっかりと念頭に入れる必要があるという意識に変わったといえる。

一方、教師 B は教授経験がまだ浅いことのほか、初めてキャンプ講師を務めたこともあり、活動の目標設定や細かい作業のプロセスを考えることで精いっぱいであり、講師を務める自信がなかったことなどの感想が述べられた。

現在、二人とも PBL を自分の授業または学校のキャンプに取り入れていることが分かる。労力や時間の制限があるため、PBL デザインを全面的に取り入れることは難しいと言っているが、できるだけ講義形式の授業を減らし、生徒が自分でよく調べ学習ができるように心がけているという。

また、自分たちで PBL を授業に取り入れる際、このやり方で良いか戸惑うこともあるという。しかし、二人が大規模のキャンプ講師を経験して戸惑いや不安を抱えながらも自分の授業や地域のキャンプに PBL デザインを導入しようとしている前向きな態度を見せているのは、意識が変わろうとしている良い兆しであろう。

5. 今後の課題

今回のキャンプ実施を通し、メイン講師を務めた 2 名の講師の気付きと成長が確認された。しかし、残った課題は大きく 2 つある。一つ目は、タイの中等教育における PBL を取り入れた授業やキャンプの展開に関することである。全国規模のキャンプ講師を務めた二人は 1 回のみ JS-Forum に参加し、そこで作成した活動案を元に学校の授業で試行し、キャンプを実施した。講師二人の PBL に対する知識や意識がどれくらい浸透しているか具体的に測れず、インタビューでも聞いたことだが、不安を抱えながら事業を全うしようとしていた。講師を務めた二人のみならず、学習者体験で一度教師キャンプに参加しただけでは同じ悩みを抱えるという報告を時々受けている。そこで、PBL デザイン活動案作成のワークショップや実践研修などのフォローアップ事業が定期的な実施できれば、教員らが PBL デザインの授業やキャンプを実施する自信につながるかもしれないと思われる。

二つ目は、キャンプ講師の PBL に対する意識の追究である。キャンプ事業のメイン講師を務めることを通し、中等教育教員らにどのような意識の変化が見られるのか、特に 21 世紀型人材育成への意識や PBL を実践しての気付きを中心に見ていきたい。今回の講師 2 名が来年度のキャンプ事業のサブ講師を務める予定である。今度はサブとなるが、講師として大規模のキャンプに参加するのが 2 回目となり、キャンプ事業の捉え方やメインではない補佐を務めることでその意識がどのように変わっていくかを検討する。そして、タイ国の日本語教育を担う教師育成支援の一助としたい。

注 1: 「にほんご人フォーラム」は国際交流基金とかめり財団主催の 10 年間にわたるプロジェクトで、ASEAN 各国と日本のつながりをより深め、21 世紀型スキルを育成すること、外国語教育としての日本語教育モデルを創造して実施し、若い世代の相互理解の促進とグローバル人材を育成することが目指されている。

【参考文献】

国際交流基金 (2015) 『21 世紀の人材育成を目指す東南アジア 5 カ国の中等教育における日本語教育—各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト—』国際交流基金日本語国際センター

鈴木敏恵 (2012) 『課題解決力と論理的思考力が身につくプロジェクト学習の基本と手法』教育出版

中尾有岐 (2016) 「21 世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修—タイ人中等教育教師の気付きと学び—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 12 号、41-55